特定非営利活動法人
宮入慶之助記念館

宮入慶之助記念館だより 第20号

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
2014（平成26）年　4月30日発行

巻頭言　地球辺境の保健改善を目指して

名誉館長　多田　功

昨年、宮入慶之助記念館は国立科学博物館、日本寄生虫学会総会、長野市立博物館、九州大学など各地の施設で住血吸虫感染経路発見100年を記念する展示やシンポジウムを開催しました。この活動を支えてくださった会員の皆様と関係施設の皆様に厚くお礼申し上げます。

さてお祭りが終わって、住血吸虫症など寄生虫病対策の現在はどうなっているかということを改めて思います。世界保健機関（WHO）は住血吸虫症、フィラリア症、トラホームなど17の熱帯病を「顧（かえり）みられざる熱帯病（NTD）」という名称で呼び、人類に与える大きなマイナスの影響への対策を推進しています。

多数の患者が現存しながら、熱帯の貧しい国々の疾病であるために薬剤の開発や対策が進まないためです。降圧剤とか抗糖尿病薬などいわゆる[儲かる薬]と違って、製薬会社はこうした疾患を無視しがちです。日本ではNTDに対応して「グローバルヘルス技術振興基金」という法人が設立されて、既存の抗寄生虫薬剤援助などのため資金援助を始めています。

住血吸虫症に関して言えば、毎年２億３千万人が治療を必要としています(厚労省検疫所ＦＯＲＴＨ)。本症には既に特効薬プラジカンテルが存在し、広大な流行地で治療に予防に投与されていますが、流行規模は一向に減少しません。それは自然の中での人間の暮らし方に深く結びついた感染経路が問題なのです。社会基盤の不備、貧困、教育不足、人口移動などがこれを加速しています。

かつてカリブ海のプエルトリコでは水系に天敵カイであるマリサを大量に投入して、住血吸虫の中間宿主であるカイを滅ぼす作戦が防圧効果を上げました。日本ではカイの生態に合わせてコンクリート溝渠を作って効果を上げました。有害な化学殺貝剤を使わないこのような研究が各国で、流行の特徴に合わせた形で進んでほしいものです。そしてそれを担うものは辺境の地の疾病治療や防圧を志す人材です。歴史的に寄生虫病という重荷を制圧した日本から、そのような志を持つ若者が出てほしいです。昨年記念館が実施した一連の展示会やシンポジウムを通じ、その希望を次世代に伝えることが多少でも出来ていれば幸いと思います。

100周年記念イベントで学んだこと

館長　宮入源太郎

昨年(2013年)は、３月の第82回日本寄生虫学会大会の企画展示を最初に、合計８件のイベントを経験しました。あっという間の１年間でしたが貴重な経験を通じ多くのことを学ぶことが出来ました。以下にご報告いたします。

○これらのイベントは学会、博物館、大学、病院、地域センター、放送局などが取り上げて下さって実現したもので、北信濃の片隅に位置する当館だけでは絶対実現できないスケールと来場者数でした。関係各位に厚くお礼申し上げます。

○イベントを通じて、展示パネルの構成方法、説明文のつくり方、展示品の並べ方などについて参考となる情報、教材を数多くいただきました。今後当館の展示室の改善・改良に反映させたいと考えています。

○イベントの計画から実施、広報までインターネット技術の活用が欠かせない手段でした。特にホームページは若い人たちへの

広報手段として必須のものになっていることが実感されました。これの充実は当館の今後の重要な課題であると痛感しました。
○日本住血吸虫症撲滅にいたる歴史物語を感動的に伝える手段としての映像の力を実感しました。NPO法人科学映像館より配信いただいた「日本住血吸虫」「地方病との斗い」を観た人の感想文やお言葉はいずれも感動を伝えるものでした。当館の展示室でも遅まきながら放映設備をつくりたいと思います。
○来場者の反応から強く印象づけられたのは、「寄生虫」の認知度が低いことでした。特に若い人で知る人は少なく、衛生状態が向上した日本の実態を体感しました。当館の展示や説明にはこのような現状を認識して、「自然界」からスタートして「寄生虫」の存在に進み、その次に「日本住血吸虫」の説明に入るような改善をしたいと思います。
○当館の展示テーマでは、患者の体験談、患者の診断・治療に努力した医師のこと、カイ撲滅事業を推進した流行地域における行政機関の活動のことなどが不充分であると気付きました。今後、このテーマについての情報収集に努めたいと思います。
○1年間が終わってみると100年記念イベントの積み残しがあると感じています。例えば、流行地である山梨県甲府盆地、広島県片山地方、福岡県・佐賀県にまたがる筑後川流域などで開催して地域の歴史の再認識と現状を伝えることなどがあると思います。
○最後に、来場者からいただいた多数のアンケートの中から私を力づけたコメントのひとつをご紹介します。
「衝撃でした。その存在を知らなかったがゆえに、非常に驚きました。日本では今では1人も患者はいないといっても、アフリカでは50%以上も患者がいる国があるということは大きな問題であると考えさせられました。非常に勉強になりました。医療系の道へ進む私にとっては良い刺激でした。私と同じようにこの寄生虫の存在を知らない方は多くいると思うので、これからもそういった人たちに伝えていって欲しいです。」

宮入慶之助記念館・理事　退任ご挨拶

石井　明（元自治医科大学）

この度、理事を退任させていただきました。当館では理事にしていただき、いろいろな経験をさせていただきました。

初めて私が日本住血吸虫に出会いましたのは、大学医学部の学生の時でした。臨床講義に患者さんが出られて、教授の前立ちに自分を含めて学生4人が並びました。寄生虫性・肝硬変でした。教授が講義をされて、前立ちに質問をされます。その時一人がばたりと前に倒れました。前の日に夜遅くまで予習をしていたのだと思います。教授はそのまま講義を続けられました。この時の講義の内容は医学雑誌に掲載されている事を後に知りました。その友人とはクラブも一緒で、今も付き合いがあります。忘れられない出来事でした。

その頃は、後に日本住血吸虫との関係が出来るとは思いもしませんでした。卒業してインターンを終わり、大学院に進み東京大学・伝染病研究所の寄生虫研究部に入れて貰いました。主任の佐々学教授はバレーボール部の顧問でした。進路の相談に訪ねましたら、ここに来なさいよとおっしゃり、はいということになった次第です。別の友人が伝研の佐々先生の所も、面白いのではないかと、話したのも一因でした。

寄生虫研究部にはブラジルで7年間の経験がある神田先生、アフリカの西の果てセネガルのベルデ岬に立った話をされる三井先生ほか、多彩な経歴の方がいらっしゃいました。土人部屋と呼ばれていました。佐々先生は当時、糸状虫症（フィラリア）の仕事を、主に奄美大島で展開していました。私の最初の仕事は奄美大島のフィラリアの疫学調査に神田先生のお供をすることでした。

寄生虫研究部では日本住血吸虫の仕事も行われていました。まず甲府の山梨県・衛生研究所に出かける機会があり、自動車で山道をめぐっての旅でした。日本住血吸

虫に感染した犬をいただいて帰りました。その犬が血便をしていた事は忘れられません。寄生虫部の大勢で甲府盆地を訪れて、ミヤイリガイの採集にも出かけました。田んぼの畔にかがみこんで箸やピンセットでつまみながら拾い上げます。携帯用の掃除機で吸いこむ試みもされましたが、困難がありました。

大学院の卒業論文はフィラリアの免疫の実験研究でした。卒業の後、奄美大島の奄美病害動物研究施設の助手となり、寄生虫感染の疫学調査、ハブ毒の研究に従事しました。英国大使館の文化部からロンドン大学熱帯衛生校の医学寄生虫学コースに留学し１年間を過ごして帰国し、東京医科歯科大学に移りましたが、再び伝研・寄生虫研究部に戻りました。この頃から日米医学協力計画が始まり、日本住血吸虫症が取り上げられて研究者の交流が始まりました。その頃、室内でのミヤイリガイの飼育を始めました。松田肇先生が工夫した方式を取り入れて、二瓶直子先生が開発した粉末の餌を分けていただき使用する事になりました。以来、この飼育槽を転任した場所に運んで部屋に設置してきました。時々粉末の餌を振りかける事で済むので、今でも自宅で飼育しています。宮崎医大では大橋真先生がミヤイリガイの大量飼育を開始しました。実験研究には多数のミヤイリガイが必要でした。プラスチックの板を組み立てて大きな水槽を作り、飼育をするのですが容易な事ではありませんでした。それでもお蔭で研究は進み論文発表が出来るようになってきました。

岡山大学医学部に転任しましたが、ミヤイリガイの採集のために自動車で中央高速道路を通って甲府盆地まで行き、韮崎の近くの休耕田で座り込んで採集しました。200個取れれば上々でした。日本住血吸虫症で有名な片山には出かける機会がありました。片山病の本拠地です。日米医学協力計画の寄生虫部会が広島県深安郡神辺町の片山とゆかりの記念碑などを視察に訪れました。千葉大学横川宗雄教授、筑波大学の安羅岡一男教授、広島大学辻守康教授、岡山大学稲臣成一教授、久留米大学岡部浩洋教授、塘晋教授ほか関係の方々でした。日本の寄生虫学会は医学会分科会の中でも歴史の古い学会です。この学会の歴史の中で日本住血吸虫の研究は燦然と輝く世界的な成果を挙げています。

よく知られているように、古来、原因不明の病気として人々を苦しめてきた風土病・地方病が日本住血吸虫として発見・命名されてから10年足らずで生活史が解明されることに至ったのは中間宿主のミヤイリガイが発見された事によります。筑後川の流域で宮入慶之助教授と鈴木稔講師によりミヤイリガイが発見され、日本住血吸虫の生活史が明らかにされたのは、その後の制圧に決定的な方向を示した事になります。後に甲府では県知事が日本住血吸虫症の流行が終息したことを宣言しました。甲府盆地にはミヤイリガイが生息していますが、病気はなくなったのです。ミヤイリガイに対する方策が成果を挙げた事によると言えます。ミヤイリガイそのものは病気が無ければ、むしろ今日では保護されるべき生物で、考え方によれば天然記念物に指定されるのが良いとさえ言えましょう。生物資源の保護が提唱されています。

宮入慶之助記念館は、こうした歴史を記録し、功績を後世に伝える役割を担っています。理事を退任させていただきますが、寄生虫学会の理事長で信州大学のご出身である東京医科歯科大学・太田伸生教授が理事に就任されましたので、今後のご活躍を期待しています。

記念館の更なる発展を祈念いたします。

記念展示雑感

会員　小森研一郎　（博士　魚類分類学）

昨年11月の九州大学医学図書館での記念展では、日本住血吸虫症についてパネルで分かりやすく説明されておりとても勉強になりました。同時にいくつかの疑問や問題点が浮かんできました。今回は私が気付いたことを少し学問的な立場から述べてみたいと思います。

まず、今でも約２億人が住血吸虫症で苦

しんでいるという事実に驚かされました。近年、日本では住血吸虫症発生の報告もなく、人々の関心も薄れるなか、住血吸虫症を治療できる医療施設も少なくなり、寄生虫の研究を行う大学も減少していると聞きました。このままでは、日本住血吸虫症を根絶した日本から住血吸虫症の研究者や治療できる医師の減少が心配です。

過日、「万能細胞」の研究で女性研究者のことが報道されました。テレビなどで報道される研究は注目を集めます。しかし、住血吸虫症は未だに2億人の人々を苦しめている病気であり、さらなる研究が必要です。近い将来、もっと多くの日本の若い研究者が住血吸虫症に関心を持ち、研究が進むことを期待します。特に九州大学の医学部の学生さんには、宮入博士をはじめ偉大な先輩研究者を目指してもらいたいものです。

日本住血吸虫症の発生地域はとても不思議です。インフルエンザやノロウイルスは日本全国で流行しますが、日本住血吸虫症は、九州北部、広島、そして関東、特に山梨でおもに発生し、その間の地域での発生は報告されていません。何故なのでしょうか？魚類分類学をやっていた私には、とても不思議です。なぜ、小さなミヤイリガイに寄生する、とても小さな寄生虫があちらこちらにとびとびで分布しているのでしょうか？この小さな寄生虫が歩いて、九州から広島、さらに関東まで移動したのでしょうか？考えれば考えるほど謎は深まるばかりです。今後の研究でこの問題が解きあかされることを期待したいものです。ミヤイリガイは九州の筑後川では駆除され、すでに日本から完全に駆除されているものと思っていました。ところが、関東地方の河川にはまだこの貝が生息していることを知り驚きました。中間宿主であるミヤイリガイが生息していれば、日本でも再び日本住血吸虫症が発生するかもしれません。最近は温暖化の影響で熱帯性の生物が日本でも増加、さらに新型インフルエンザなどの発生も予想されています。今後、新種の日本住血吸虫症の対策が必要です。

もうすでに、新型の日本住血吸虫症が私たちの身の回りに忍びよっているかもしれません。

九州大学での日本住血吸虫中間宿主発見百周年記念展を終えて

（会員）　小島　夫美子（九州大学大学院保健学部門）

1913年に当時九州帝国大学医科大学の教授であった宮入慶之助先生と助手の鈴木稔先生が日本住血吸虫の中間宿主であるミヤイリガイを発見し、ヒトへの感染経路を明らかにしてから丁度100年が経ちました。九州大学ではこれを記念し、2013年11月１日より１ヶ月にわたり、九州大学附属図書館医学図書館にて宮入慶之助記念館との共催により日本住血吸虫中間宿主発見百周年記念展が開催されました。

私は現在、九州大学で寄生虫学を専門として教育や研究に携わっています。２年前にあることをきっかけとして本記念館の名誉館長であり、九州大学名誉教授でもある多田功先生と出会いました。その縁で、現館長の宮入源太郎氏をご紹介いただき、私もこの記念展の企画に参加させていただくことになりました。私にとって今回の記念展に参加できましたことは大変喜ばしく、またこのような機会を得られましたことに心より感謝申し上げます。

開催期間中、記念展の様子をうかがいに図書館へ何度か足を運びましたが、その度に来場者の方々がパネルを熱心にご覧になり、そして多くの方が展示を見て感じた事を率直にアンケートに残される姿を見て、百周年記念展開催が如何に有意義な事業であったかを感じました。また、アンケート内容からも本記念館が目標としています“宮入慶之助の業績を後世に伝えると共に、先人の努力の歴史を末永く伝えること”が十分に浸透した素晴らしい記念展であったと思います。私自身も今回の記念展を通し、これまで断片的だった日本住血吸虫・吸虫症に関する知識が歴史的に（時間の流れに沿って）整理され、あらためて日本住血吸虫について学び直すきっかけを得ました。一方で、ひとつの寄生虫症を防圧するため

に、どれだけ多くの歳月と莫大な費用が必要であるかを知り、その大変さについても考えさせられました。世界の中にはいまだに住血吸虫症によって健康を阻害され苦しんでいる人々が多くおられます。宮入先生の偉大な業績を誇りとし、またその事を若い世代に末永く継承していくためにも、私たち日本人は世界に蔓延している住血吸虫症防圧のために様々な形での支援を行っていく必要があると思いました。そのためにもこのような記念展が引き続き開催されますことを願っています。

百周年記念展をお手伝いして

会員　川野和樹

この度の九州大学医学図書館での百周年記念展をお手伝いさせて頂きました。きっかけは当館の監事である私の叔父とのつながりでしたが、何よりも宮入先生ご活躍の福岡に住む者として、今回の記念展に係われたことは大変光栄なことだったと思っています。

具体的には告知ポスター制作、会場レイアウト、映像加工等のお手伝いをさせて頂きました。限られた予算と使用会場のスペースの関係もあって、あまりお役にたてなかったかも知れませんが、来展された方に「初めに解説パネルを読んでその後記録映像を観たことで、もう一度、解説パネルを読みたくなった」というお声を頂いて、わずかながらうれしく思いました。100年と言ってもその感じ方は様々です。宮入先生ゆかりの資料の中にもいくつか感じるものがありました。今ではまったく面影がない当時の学舎風景や、裏門近くにあった松林の海岸線の写真に、100年という時の長さを感じました。その反面、宮入先生の逸話の中に「うまい飯は衛生学では食われんよ」という今でも巷で話題にするような言葉があったり、さらに「人の手を借りるのが嫌いだった」「お酒が大変お好きだった」という先生のお人柄に時代を超えた親近感を覚えました。そこに100年の隔たりは感じませんでした。それにしても、まともな科学的な解析装置がない時代にどれだけのご苦労があったことでしょう。

今以上に自分の五感が頼りだったことは容易に想像できます。新たな発見や創造に必要なことは道具ではなく、得られた情報をどれだけ自分で信じるものに高められるかの違いだろうと感じました。それは時を経た現代でも変わらないことだと思います。今回の記念展は100年という節目であると共に、『宮入通り』から発信したことは大変意義深いことだと思います。と同時に、私もその活動を通して、いろいろな方々との結びつきが生まれたことも大きな成果でした。医学図書館の方々にも数々のご協力を頂きました。何より宮入館長の気苦労されているお姿に何度も頭が下がる思いでした。多田名誉館長をはじめご関係各位の皆様、そして宮入館長本当にお疲れさまでした。素晴らしい機会をお与え頂きありがとうございました。

記念館活動記録（平成25年12月以降）

□平成25年12月22日午後1時より1時50分まで山梨放送ラジオが特別番組「水腫脹満茶碗のかけら～地方病100年の闘い」を放送、当館の活動、林正高医師の体験談、元患者の体験談などが紹介されました。

□平成26年1月19日　東京医科歯科大学にて理事会を開催、100周年記念行事についての反省など議論しました。

□3月15日　昨年逝去された宮入慶之助の孫・村山定男氏の親戚代表丹野廉三氏より、遺品の宮入慶之助の肉筆原稿「フリードリッヒ・レョフレル先生」（昭和9年の日本伝染病学会雑誌に連載）が寄贈されました。

会員入会へのお礼

（順不同、敬称略）

（会員）　宮崎　勇、　二瓶　直子

ご支援へのお礼

（順不同、敬称略）

次の方々からご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

寄　金　清永　孝、　小山　政治

寄　贈　丹野　廉三

資料貸出　福山市神辺支所保健福祉課

映像提供　NPO法人科学映像館

宮入慶之助記念館販売品のご案内

「ミヤイリガイ発見百周年」記念グッズを販売しています。

○記念ストラップ　1,050円（送料共）
（ミヤイリガイ標本が封入されています）
○Tシャツ（カラーは、白、黒。サイズは、L、M）　1,680円（送料共）
（日本住血吸虫をデザインしています）
ご注文は、事務局（TEL/FAX 026-293-3828）まで。
郵便振替口座番号　００５９０－６－８２１２２　加入者名　宮入慶之助記念館

編集後記

○この冬は例年になく寒い日が続きました。そんな中を山梨から卒業論文のための調査に、東京と兵庫から修士論文の資料収集に来館者がありました。エアコンと石油ストーブを動員して冷え切った館内を暖めてお迎えしましたが、寒さをものともせず熱心に資料を調べている様子に感心すると同時に当館所蔵品がお役に立つことにうれしい思いでした。

○本号では昨年のミヤイリガイ発見百年記念行事にご支援いただいた方に感想を語っていただきましたが、この貴重な経験を今後の記念館活動に生かしていきたいと考えています。引き続き皆様のご支援をお願いいたします。

宮入慶之助記念館だより　第20号
発行者
特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
編集者　宮入源太郎
〒388-8018　長野市篠ノ井西寺尾2322
Tel&Fax（事務局）026（293）3828
（記念館）026（293）4028
ホームページアドレス　http:www5.ocn.ne.jp/~miyairi/
発行日　2014（平成26）年　4月30日